

第4回懇談会で出た意見の概要

懇談会の中で出された意見のほか、事務局に提出されたリスクコミュニケーションチェックシートの内容を含みます。

参加者の役割について

懇談会のように、一人でファシリテーターとインタープリターを行ってもよいし、ファシリテーターを住民や行政が行ってもよいと思う。

ファシリテーターとインタープリターは別々にしたほうがよい。

ファシリテーターが民間の方だと質問しやすい。

インタープリターには専門性が必要である。

取り上げる内容について

有害物質だけでなく、騒音とか悪臭などの身近な苦情内容や対策を積極的に説明することにより会社と住民の距離が近くなる。

通常時での化学物質の管理方法だけでなく、緊急時にはどのように対応し、住民とどのように連携していくかの話があるとよい。

地域住民の中には会社の従業員がいる場合も多いので、健康管理についても情報を出せるように準備しておくとうよい。

説明する際の留意点について

環境方針や工場の特徴などを最初に強調すると、そこから議論が発展していく。

全体的な環境方針だけでなく、どのくらいの削減目標を持ってやっているのかというような話もあるとうよい。また、目標に対する具体的な見通し（現状はどのくらい削減され、どのようなペースで削減していくか）があればよい。

住民が直接目にする商品を作っていない工場でも、目にする商品を写真で示して、「工場で作っている製品はこんな商品になります」という説明をすることで、住民の心をつかむことが必要である。生活に必要なものを作っているということで地域住民に納得してもらえないと、リスクコミュニケーションは始まらない。

最初に環境に関する物質フロー、全体の工程がどのようになっている、どこからトルエンやキシレンが排出されているのかの説明があるとわかりやすい。

対策をとって、何がどのくらい削減されたかというようなデータがあると説得力があつてよりよい。

工場見学会を開催されているのであれば、参加者の反応や、工場見学に参加する方法などの紹介があればよいと思う。

工場のマイナス面も説明したほうが、住民が聞きたい情報でもあるし、工場への信頼やコミュニケーションにつながると思う。(誤解を招かない、意図的に隠していると思われないプレゼンテーションの仕方が重要)

わかりやすいただけではなくて、少し深い内容を説明することで、より工場が信頼される。

説明を聞く側及び意見交換時の留意点

注目している化学物質を減らすことによってとんでもなくエネルギー消費が多くなったということではいけないので、全体的な環境負荷を減らさなければいけないということを理解しなければならない。

リスクコミュニケーションやP R T R制度は、リスクを減らすということが目的なので、本当に住民や事業者にとってリスクの削減になっているのか、ということを議論する必要がある。

資料作成時の留意点について

絵や写真を多用するとわかりやすい。

その場で説明しきれなくても、参考となるホームページのアドレスを書くなど、参加者が家に帰ってから調べられるようにするとよい。

情報の発信について

モデルを作っても、これだったら取り組んでみようという状況を作らないと広まっていけないので、リスクコミュニケーションを行うメリットを市民の方などから出していただいて、「取り組んでいこう」という機運が名古屋から作られていけばよいと思う。

この地域は先端的な工業製品を作る地域だが、それを作るのにふさわしい先端的なカルチャーを作っていくという気概を持っていければよい。